

改訂の序

本書の初版であるレジデントノート増刊「糖尿病薬・インスリン治療 知りたい、基本と使い分け (Vol.19 No.11)」が発売されて2年半が過ぎました。世の中にはさまざまな総説の特集雑誌が数多発行されているのですが、どうしてもそれぞれの筆者の向いている方向がバラバラな場合が多く、長く愛されるものにはなりにくいと思っていました。ですからやっぱり単行本、しかも単著に限ると思って今までに数冊の本を書きましたが、ある程度の厚さが必要なので字数も半端ない長さです。なかなか容易いものではありません〔実は最近5年以上ずっと温めてきた単著をやっと書き上げて、ホッとしているところです(笑)〕。ところが、初版が発行されて間もなく、編集部から非常に評判がよい=よく売れている、という報告をいただきとてもうれしく思いました。その理由を考えますとやはり、執筆いただいた先生方がどなたも第一線の臨床に接し、常に患者さんの血糖コントロールの改善に尽くしておられる方ばかりだったからだと思います。そういう意味で「向いている方向」が一致したのだと思います。増刊号の改訂版というのは私もはじめてでしたので少し戸惑いましたが、2年半は短いようで長いです。この間、SGLT2阻害薬とGLP-1受容体作動薬はその臨床的地位が格段に上がって、欧米では第一選択薬の1つに加えられるようになりました。また、インスリンとGLP-1受容体作動薬の合剤が上市されています。配合といってもインスリン注射をしたことがない患者さんに最初から配合したものを使っているのですから、これまでの配合剤とはかなり意味が違います。また、血糖モニター法やインスリンポンプの進歩も目を見張るものがあります。多くの先生には初版からの変更点の追記や改編をお願いし、数人の先生には新たなテーマを担当いただいたので少し本が厚くなりました。この「改訂版 糖尿病薬・インスリン治療 基本と使い分けUpdate」をお手にとっていただき、再度ご批判をいただけますと幸甚です。

新型コロナウイルスがわが国でも蔓延して、学会や講演会の多くが中止や延期になり、家で夕食を摂ることが多くなっている今日この頃。「あれ、今日もパパ家にいるの?」って子どもに言われて何か不思議な気持ちです。これから日本はどうなるんだろうと少し心配しながらこの改訂の序を書いています。

2020年3月

東邦大学医学部内科学講座 糖尿病・代謝・内分泌学分野
弘世貴久